



# 未来に つなぐ まちづくり 塾



｜事｜業｜報｜告｜会｜

事業報告書



## 事業概要

テーマ『私たちの未来の課題に向き合う』

SDGs（持続可能な開発目標）に示された「11.住み続けられるまちづくりを」に取り組んでいくために、とりわけ北海道寿都町と福島県浜通りに暮らす若者にとって最も身近な環境問題の一つが“核のゴミ”すなわち「高レベル放射性廃棄物」の処分です。言うまでもなくこれは持続可能な地域づくりに関わる身近な問題であるとともに、エネルギー安全保障に関わる普遍的かつ世界的な問題でもあります。両地域で暮らす高校生が、交流しながらこの課題に向き合うことを通して、故郷のまちづくりそして地球と自分自身の未来について考える事業です。

## 開催目的

広い見識を持った次世代のリーダーを育成することを目的とします。



## オリエンテーション・事前研修

夏季研修に向けて浜通り・寿都の高校生が、自分の町のこと・相手のまちのことについて学びました。

## Content

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 事業概要・開催目的 .....            | 1  |
| オリエンテーション・事前研修 .....       | 3  |
| 本研修(夏季研修 in 浜通り) .....     | 5  |
| 本研修(夏季研修 in 寿都) .....      | 7  |
| 六ヶ所村研修 .....               | 8  |
| 事後研修・事業報告会準備 .....         | 9  |
| 事業報告会 .....                | 10 |
| オイスタービレッジ吉野社長 質疑応答 .....   | 12 |
| <b>「未来につなぐまちづくり塾」事業報告会</b> |    |
| ・主催者挨拶 .....               | 13 |
| ・来賓挨拶 .....                | 14 |
| ・成果発表 .....                | 15 |
| ・パネルディスカッション .....         | 29 |
| ・講評 .....                  | 36 |
| 新聞記事 .....                 | 38 |

6/11  
(土)

12:30 浜通り高校生  
受付開始

13:00 オリエンテーション  
～研修①



●受付



●東日本大震災・原子力災害伝承館を見学しました。



●当時のまま残されている小学校を見学しました。



19:00 研修② (振り返り)  
J-VILLAGE



●オリエンテーション～研修



6/12  
(日)

8:00 研修③  
(寿都高校)



●取材

13:30 浜通り高校生  
寿都高校生  
保護者説明会  
J-VILLAGE  
(オンライン)



●保護者説明会



# 本研修

夏季研修 in 浜通り

8/8  
(月)

8:15 寿都高校生  
ホテル出発

8:30 浜通り高校生  
富岡駅集合

9:00 廃炉資料館・  
第1原発 見学



●廃炉資料館・福島第一原子力発電所を見学しました。



15:00 双葉町 見学



●双葉町を見学しました。



19:00 研修④

21:00 振り返り  
J-VILLAGE



●当時のまま残されている双葉南小学校を見学しました。



8/9  
(火)

8:00 研修⑤  
J-VILLAGE



13:00 研修⑥  
J-VILLAGE



19:00 研修⑦  
J-VILLAGE



●日本エネルギー政策、原子力政策、放射性廃棄物処理に関して勉強しました。

21:00 振り返り



夏季研修 in 寿都

8/10  
(水)

16:30 交流会  
ゆべつの湯



●寿都町役場の皆さんが、BBQを行って交流会を開催してくださいました。

20:30 振り返り  
ダイマル大谷会館



8/11  
(木)

9:00 研修⑧  
(文化財展示室での説明：学芸員)



13:00 研修⑨



●寿都町 片岡春雄町長から町の事についてお話を伺いました。

21:00 振り返り  
ダイマル大谷会館



8/12 (金)

- 9:00 研修 ⑩
- 13:00 研修 ⑪
- 15:00 研修 ⑫  
(発表会に向けてグループワーク)
- 21:00 振り返り  
ダイマル大谷会館



●夏季研修で学んだことを整理し、班ごとにディスカッションし最後は発表を行いました。



8/13 (土)

- 9:15 寿都高校生 解散  
浜通り高校生  
ホテル出発



9/17 (土) 9/18 (日)

六ヶ所村研修

- 青森県六ヶ所村  
原子燃料サイクル施設 見学



●核燃料再処理工場のある青森県六ヶ所村を訪問しました。

事後研修・事業報告会準備

10/8 (土)

- 9:00 浜通り高校生 集合
- 9:30 研修 ⑬  
J-VILLAGE
- 13:00 研修 ⑭  
J-VILLAGE
- 19:30 研修 ⑮  
J-VILLAGE



10/9 (日)

- 9:00 研修 ⑯  
J-VILLAGE
- 13:00 研修 ⑰  
J-VILLAGE
- 15:00 事業報告会  
リハーサル
- 19:30 研修 ⑱  
J-VILLAGE



●翌日に迫った事業報告会のリハーサルを行いました。



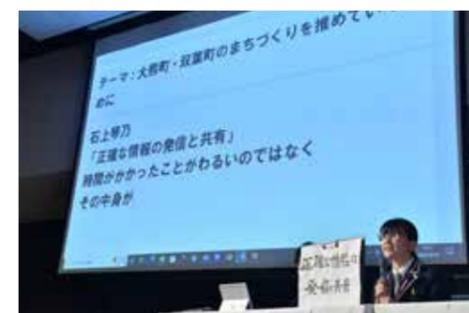
# 事業報告会

10/10  
(月・祝)

9:30 事業報告会 受付開始  
10:00 事業報告会  
J-VILLAGE ホール



12:30 報告会終了



# 『未来につなぐまちづくり塾』事業報告会

●開催日時 令和4年10月10日(日) 開会 10:00

●開催会場 J-ヴィレッジ ホール

1. 開会の挨拶 いわき青年会議所 三室 志帆

2. 主催者挨拶

特定非営利活動法人ハッピーロードネット 理事長 西本 由美子



震災と原発事故から11年目となり、ようやく高レベル放射性廃棄物、そしてトリチウム水をテーマに、こうして高校生の皆さんと考える場を設けられる時期にきたと思っています。今回は北海道の寿都町、そして浜通りの高校生が10名ずつ、20名で考えてみようという企画をいたしました。なぜ北海道の寿都和私たちの浜通りが一緒に考えなければいけないかということですが、福島第一原発にある高レベル放射性廃棄物を一体この先どうするのか、若い世代はどうしていけばいいのかという問題と、寿都町長さんが文献調査の受け入れを表明していただいた寿都町、それを若い人たちがどう理解するのかということ。核のごみという問題では同じだと思いましたが、じゃあ一緒に知恵を出し合って考えようということで、私は思い切って北海道の寿都町まで行ってきました。すると、寿都町長さんは快く「やりましょう」おっしゃってくれて、今回の報告会につながりました。ですが、すんなりできたわけではありません。高校生たちは高レベル放射性廃棄物という謎の物体に対して知恵を出し合うのがとても大変でした。でも、大変だからこそ、私たちが最初にやらなければいけないと思います。福島の浜通りに住んでいる高校生の声だから、全国の皆さんに伝えなければいけないと思っています。逆に、この子たちが発信しないと、全国の高校生は何もわからないまま毎日を過ごしていくのかなとも思います。これから20名の高校生、5名のファシリテーターの大学生がしっかりと発表いたしますので、会場にお越しの皆さん、どうか高校生の思いを汲み取ってください。そしてこれから先も応援していただきたいと思っています。

この日を迎えるまで、大変な中で高校生を支えてくれたスタッフの皆さんに感謝しています。今日はお忙しい中、大熊町長さん、寿都町長さん、そしてたくさんの来賓の方が来てくださっています。ありがとうございます。高校生の皆さん、さあ、今日はあなたたちが主役です。自分の思いをしっかりと伝えてください。



## オイスタービレッジ吉野社長 | 質 | 疑 | 応 | 答 |

**Q** (高校生) 寿都町に核のごみを持ってくることについての考えは？

**A** (吉野社長) 核のごみを持ってくるのは「アウト」。こんなにきれいなところに核のごみは考えられない。そもそも核のごみの文献調査が進んでいる時点で町に対して色々なイメージが付いてしまう。町長の政策には首尾一貫性が感じられない。原発事故は確かに悲惨な事故だったが、逃げ出さない限り、復興は進められる。

**Q** (高校生) 首尾一貫性がないというのが具体的にどの部分か？

**A** (吉野社長) 住民説明会や議会での話し合いがない中で町長が勝手に決めた。町レベルで多数決で考えるのではなく、国自体で考えていかないといけない。

**Q** (高校生) 住民説明会ではどういう話が出たのか？

**A** (吉野社長) 町長は核のごみについて「勉強しよう。勉強しよう」と言うだけだった。時間を掛けて議論を重ねるなど、文献調査についてももっとゆっくり進めてほしかった。

**Q** (高校生) 町長は核のごみ問題について「一石を投じたい」という思いで応募したと言っていた。その受け止めは？

**A** (吉野社長) だとしても町民の理解が最優先だったはずだ。

**Q** (高校生) 町長は風力発電事業を進めるなど、町のことを考えているように思うか？

**A** (吉野社長) それはまた別の話かなと思う。町長は「1番先に手を挙げたい」と言っていた。理解できない。交付金だけもらって受け入れないという姿勢を期待しているが、次の概要調査に進んだらもう後戻りできない気がする。

**Q** (高校生) 反対派の意見として「どうして自分の町で受け入れないといけないのか」という考えはあるか？

**A** (吉野社長) 正直、自分の家の前にごみステーションを置かれるような感じ。原発のある地域のそばに置けばいいと思う。自分の町の地中に埋められるのは不安で仕方ない。

**Q** (高校生) 処分場が寿都町に決まった場合、風評被害は起きると思うか？

**A** (吉野社長) もちろん起きる。

**Q** (高校生) 核のごみや最終処分場について勉強はしているのか？

**A** (吉野社長) 大学教授らを招いた勉強会を開くなど、勉強はしている。

※そのほか、吉野社長が話したことを以下記載します。

- ・寿都町は小さなコミュニティでなりたっているだけに、文献調査の問題によって地域が二分化された感じがする。
- ・町長の説明に納得できないまま話が進んでいるのが許せない。
- ・しっかりと説明をしてほしいと思う。
- ・どこかで折り合いを付けなければいけないが今の町長のままでは厳しいと思う。



### 3. 来賓挨拶

#### 大熊町長 吉田 淳様

おはようございます。本日は「未来につなぐまちづくり塾」報告会にお招きをいただき、ありがとうございます。このように多くの方がお集まりの中でご挨拶をさせていただけることに感謝しております。

8月に生徒の皆さんの前で講話をした際には、大熊町の震災の状況、そして復興について熱心にお聞きいただき、鋭いご質問などもいただきました。高レベル放射性廃棄物の処分について、皆さんのような若い方が中心となって自分の事として真剣に考え、取り組んでいること、とても頼もしく思います。本日は学校では教えられないことを様々な方から聞いて、学んで、議論を重ねてきたこれまでの成果を報告していただけるということでありますので、とても楽しみにしております。先送りだけでは問題の解決になりません。しっかりと聞かせていただきたいと思います。

町の状況について少し述べさせていただきます。私たち大熊町は約8年間の全町避難のあと、2019年、大川原地区、中屋敷地区が解除になりました、そこを足がかりに町の拠点を構え、役場から始まり、来年の学校整備まで、現在、順調に整備が進んでおります。今後は今年6月30日に解除になりました大野駅周辺に整備の中心をもっていきたいと取り組んでいるところであります。困難ではありますし、特効薬、近道はありません。地道に一つ一つ重ねてやっていくしかないと思っております。

今後、またいろいろな方々に町の復興についてご協力、ご支援いただくものと思っておりますので、その際はまたよろしくお願いたします。開会の挨拶に合わせてお願い申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。



#### 寿都町長 片岡 春雄様

「未来につながるまちづくり塾」の事業報告会にお招きをいただきましてありがとうございます。企画くださいましたNPO法人ハッピーロードネットの西本理事長はじめ関係者の皆様に心から感謝と御礼を申し上げたいと存じます。

昨年、将来の福島の復興を担う人材育成を目的とした研修事業の中で、高レベル放射性廃棄物の最終処分にかかる文献調査に応募した私に、福島の高中生と意見交換会をやりたいという要請があり、リモート、または対面での意見交換会が実現いたしました。一昨年、最終処分地の議論がなかなか進まない中で、一石を投じなければならぬのではないかと文献調査に応募いたしました。メディアのネガティブな報道の中、もやもやとした状態でおりました。けれども、高校生との気兼ねのない意見交換ができたことで、爽やかな気持ちになるとともに、高校生から力強いエネルギーをいただきました。

また、同じ年に寿都高校の総合的な探究学習の発表会で、1年生から文献調査について賛否を抜きにしっかり学ぶことが大切ではないかという提言がなされました。私はその提言にぜひ応えなければいけないとの思いから、校長先生に了解をいただき、西本理事長に相談いたしました。それがこのたびのまちづくり塾につながったということで、嬉しく思うところであります。

高校生の皆さんには、大事な夏休み、また休日を利用しながら、大熊、双葉、寿都、そして六ヶ所のほうも見学されたということで、現場を自分自身の目で見て、肌で感じて、いろいろな思いを強くしたのではないかと思います。本日は各班のテーマごとにどのような発表をされるか大変楽しみにしております。皆さん、リラックスして発表会に臨んでいただきたいと思います。また、この発表会が全国の同じ年代の若者、そして多くの国民の皆さんに伝わり、原発、福島の復興、高レベル放射性廃棄物の最終処分についての議論の輪が広がることを期待しております。



### 4. 成果発表

## <5班> ■テーマ「大熊町・双葉町と寿都町のこれからのまちづくり」

#### ●大学生ファシリテーター 伊藤 修汰（小樽商科大学4年）

#### 発表 高校生

- 愛澤 美優（磐城桜が丘高校2年）
- 若松 叶恵（いわき光洋高校1年）
- 三浦 碧唯（寿都高校1年）
- 日下部 颯太（寿都高校2年）



#### ●3つの町に共通する課題

私たち5班は研修を通してまちづくりに興味を持ちました。大熊町、双葉町、寿都町のおかれた現状は大きく違いますが、共通点として、これからの課題があるということです。そこで私たちは、各町の町長にお話を聞き、私たちが考えたまちづくりについて話したいと思います。

これは大熊町、双葉町、寿都町の関連性ですが、大熊町、双葉町は、原発誘致による交付金を活用してきた町で、寿都町は高レベル放射性廃棄物の最終処分場の文献調査による交付金を活用してきました。交付金をまちづくりに活用しているという点で類似しています。

ただ、両町の現状は大きく異なり、大熊町、双葉町は、最近になりようやく避難指示が解除され、住民が戻りつつある状況で、寿都町は最終処分場の文献調査によって意見が大きく分かれ、住民が分断されている状況にあります。置かれている状況が大きく異なるということが言えます。以上が大熊町、双葉町と寿都町の関連性です。

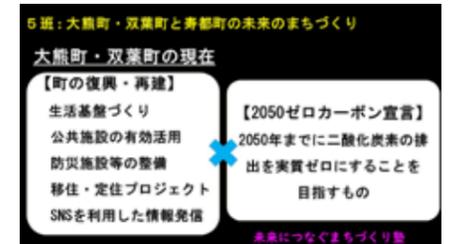
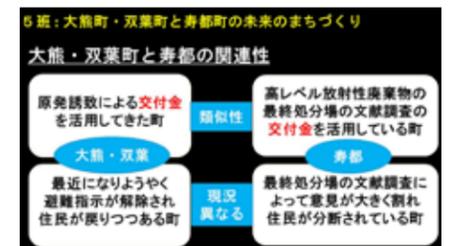


#### ●大熊町、双葉町の取り組み

大熊町、双葉町の震災から今日までの経緯を説明したいと思います。2011年3月11日に、東日本大震災によって、福島第一原子力発電所事故が発生し、大熊町、双葉町が被害を受けました。それに伴って、2022年8月末まで一部を除いたほぼ全域が帰宅困難区域に指定されてしまいました。しかし、2022年8月30日になり、ようやく特定復興再生拠点区域内での避難指示が解除され、現在、復興を行っています。

復興の内容として、生活基盤づくりや、公共施設の有効活用、防災施設等の整備、移住定住プロジェクト、SNSを利用した復興の情報発信などを行っています。これらの取り組みは町民の生活の基盤をつくることを目的としています。

また、大熊町は「2050ゼロカーボン宣言」を掲げています。これは、二酸化炭素の排出を大幅に削減し、2050年までに実質ゼロにすることを目的としています。大熊町がこれを掲げる理由は、原発事故が背景にあり、原子力に頼るのではなく、再生可能エネルギーを活用した持続可能なまちづくりを目指しているからです。以上が大熊町、双葉町の取り組みです。



■テーマ「大熊町・双葉町と寿都町のこれからのまちづくり」

●寿都町の取り組み

寿都町の取り組みについて説明します。代表的なものとして「地域資源を活力とした賑わいあふれる町」というのを掲げています。この具体例として、風力発電などの再生可能エネルギー、パズルをはじめとする新たな農産物の生成などが挙げられます。

また、寿都町は高レベル放射性廃棄物の最終処分場の文献調査を受けていることで注目されています。文献調査の交付金をまちづくりに活用できる一方で、文献調査を受けることに対し、住民の意見が大きく分かれており、住民が分断されているという状況にあります。高レベル放射性廃棄物については、3班が詳しく説明します。

●町を訪れて感じたこと

私たちは、帰還困難区域にある双葉町を訪れ、小学校や町役場を視察し、双葉町、大熊町の町長に講話をしていただき、町の現状の理解を深めました。そこで、避難してから3日で戻れると思っていたお話や、手付かずの家屋や、当時のままの小学校の説明をしていただき、原発事故を経験した人にしか語れない言葉があると感じました。実際に現地へ行くことによって、五感で得た事実を身近な人から広めることで風評を防ぐことができるのではないかと私は考えます。風評については、2班が詳しく説明します。

双葉町、大熊町の研修を通して、原発被害の悲惨さを知り、原発事故を忘れてはいけないと実感し、その悲惨さを次世代へ伝え、多くの世代が話し合うことの必要性を認識しました。

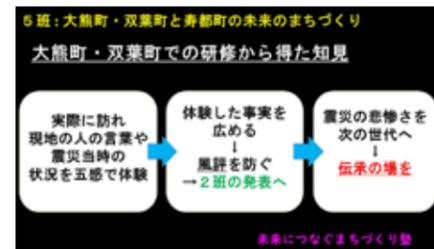
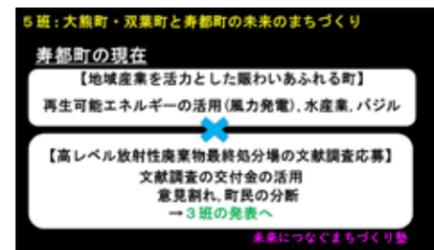
寿都町での研修では、片岡町長が様々なことにチャレンジしているお話を聞きました。町内で意見が分断しているのを見て、マスメディアを通して切り取られた情報に頼りすぎるのではなく、現場を五感で感じ、事実に基づいた情報を見つけ、自分で考えるための教育の重要性に気がきました。教育については、4班が詳しく説明します。

私は、自分の意見を押し付けるのではなく、事実に基づいた知識をつけた上で、互いの立場に立ち、理解、尊重のある話し合いをし、事実に基づいた方法、それぞれの意見を広めることが大切だと考えます。また、寿都を訪れてみて、学業支援の厚さ、風が強いという弱点を風力発電にし、町のシンボルにするという強さも感じました。

●大熊町、双葉町でのワークショップ

研修中に行ったまちづくりについてのワークショップの内容紹介と、それをもとに私たちが考えた課題について発表します。双葉町と大熊町の研修で行ったワークショップでは、土地の印象が悪いなど、原発事故の影響からの課題が多く上がりました。私たちの班では、課題とその解決策を考えました。

1つめの課題は復興についてです。双葉町と大熊町にとって、町の復興が最優先事項だと思うので、私たちはまず、どのように町の復興を行っていくかを考えました。私たちが考えたのは、まちおこしPRと、避難者向けの支援です。まちおこしPRでは、大人と若い世代が協力し、SNSで特に若い人に注目を集めるような企画を考えることが大事だと思います。具体例として、例えば大熊町のホームページで特産品として紹介されているフルーツや魚などの意外なレシピを考え、それぞれの旬の時期にSNSで発信するなどを考えました。流行に敏感な若者をPRに加えることで、発信できる範囲が広がるのではないかと考えました。避難者向けの支援では、町長のお話で、震災後に戻ってくる人が少ないということだったので、住宅の整備などの支援を行い、自分の町へ帰還したいと思っている人が帰ってきやすくなる環境がつかれるといいなと思い



■テーマ「大熊町・双葉町と寿都町のこれからのまちづくり」

ました。

2つめの課題は、震災の悲惨さをどのように伝えるかです。実際に原発を訪れ、福島での過去の被害を実感し、忘れてはいけないということを改めて感じました。そこで、私たちはこのような福島第一原発や関連施設を見学できる取り組みが重要だと考えました。これを行うことで、原発事故を自分の目で見て、感じるができます。

私たちが今回行ったこの研修のように、それぞれ違う町や環境で育ち、違う価値観を持つ人が集まり、交流し、意見交換をするツアーを実施すると良いのではないかと考えました。そうすることで、自分たちの今回の学びをほかの多くの一般の人にも体験できるようになり、深い議論をできる人が増えるのではないかと考えました。それが町のより良い未来につながっていくと思いました。

●寿都町でのワークショップ

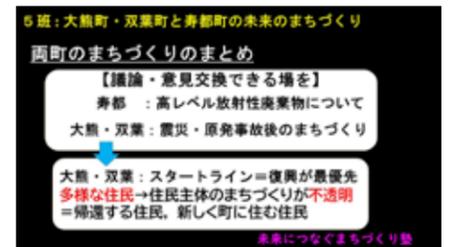
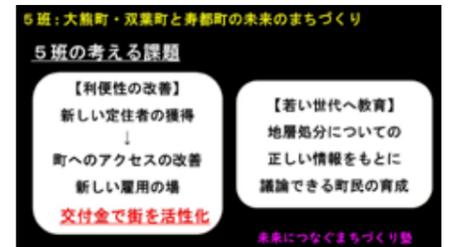
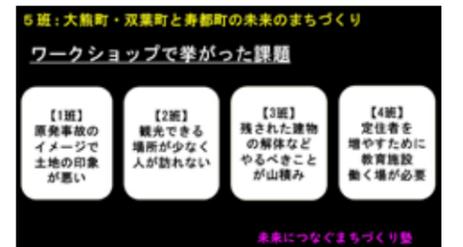
寿都町のまちづくりについてのワークショップを紹介します。寿都町で行ったワークショップでも、双葉町、大熊町で行ったワークショップと同様に班別で意見交換を行い、全体で意見を共有した結果、各班で課題が見られました。例えば1班では、最終処分場の文献調査による町民の分断、2班では、交通の便や飲食店が少ないという意見が出ました。それをもとに、私たち5班は、寿都町のまちづくりの課題について考えました。「利便性の改善」と、「地層処分について若い世代へ教育」についての2つに分けて発表します。

まず、利便性の改善についてですが、新しい定住者の獲得のためには、町へのアクセスの改善と、新しい雇用の機会が必要と考えました。現在、寿都町へのアクセスとしてバスや車しかなく、バスの本数も限られているので、人を呼び込むことが難しい状況にあると思います。そこで、交通の便を増やすこと、買い物のできる施設をつくることで、利便性が高まり、人が訪れたい、住みたいと思えるような町になるのではないかと考えました。そうすることで、新しい雇用の機会も増えていくのではないかと考えました。もちろん、費用の問題があると思いますが、文献調査の交付金を活用できるのではないかと考えました。

地層処分についての若い世代へ教育についてです。最終処分場の文献調査の賛成・反対は別にして、町民が正しい情報をもとに議論していくことはとても大切です。特に、これからの未来を担っていく若い世代こそ、正しい情報を身につけることが大切だと考えました。そして、若い世代から大人まで、幅広い世代の多くの人から自分の意見を主張することのできるディスカッションの場を設けることも大切だと考えました。そうすることで、より深い議論ができ、町のより良い未来につながるのではないかと考えました。

●意見交換ができる場の必要性

双葉町と大熊町のまちづくりと、寿都町のまちづくりについてのまとめです。まちづくりの共通点として、意見交換ができる場が必要だと考えました。寿都町では、高レベル放射性廃棄物について、双葉町、大熊町では震災と原発事故の被害について話せる場が必要だと考えました。しかし、双葉町と大熊町の場合は特殊な状況で、スタートラインとして町の復興から始めなければいけません。それに関連して、住民を増やしていく中で、帰還してくる住民と新しく町に住む住民という多様な住民によるまちづくりをしていかなければならないので、住民主体のまちづくりが不透明です。そういった状況なので、議論、意見交換ができる場が必要になります。



■テーマ「大熊町・双葉町と寿都町のこれからのまちづくり」

●まちづくりについて、それぞれの思い

最後に、私たち5班のまちづくりについての思いを発表します。

私はこの研修を通して、まちづくりというのは様々な問題があり、何年も何十年もより良い町をつくらうとしているので、簡単なことではないということがわかりました。このような経験を高校生でさせていただく機会はありません。だからこそ私たち高校生が、他人事ではなく、まちづくりをしていく一人として考えたいと思います。

私は、研修を通して、双葉町、大熊町、寿都町の各町長のそれぞれの決断への葛藤を知るとともに、立場による考え方の違いを実感しました。自分の意見だけが正しいと思わず、相手を理解すること、事実に基づく情報を持つ教育の重要性に気づきました。今まで社会問題は自分から遠いものだと考え、あまり積極的に情報を得よう、考えようと思いませんでしたが、今回研修を通してグループワークをすることで、様々な意見を聞き、社会問題を自分ごと化し、原発事故、高レベル放射性廃棄物、文献調査について関心を持つことができました。このような状況が私たちの次の代にも続き、様々な社会問題に対する意見の食い違い、すれ違いの起こらないまちづくりが進むことを心から願います。

私は研修を通して、原発事故が起こってしまった双葉町と大熊町を実際に訪れて原発に行ったことや、町の様子を見て、たくさんのことが印象に残りました。町長のお話を聞いたり、まちづくりの様子を詳しく知ることができました。この研修で学んだことが無駄にならないようにし、寿都町の未来のためにもこの研修で勉強になったことや、知ったことを、まちづくりに参加し、知識を伝えていきたいと思いました。

以上で5班の発表を終わります。



〈3班〉 ■テーマ「高レベル放射性廃棄物とそれらを取り巻く問題について」

●大学生ファシリテーター 伊藤 結 (宮城教育大学2年)

発表  
高校生

- 石上 琴乃 (ふたば未来学園高校1年)
- 栃本 龍生 (白河高校2年)
- 蝦名 由芽子 (北海道寿都高校1年)
- 及川 大和 (北海道寿都高校2年)

●高レベル放射性廃棄物とその処分方法

私たちは、高レベル放射性廃棄物と、それを取り巻く様々な問題について発表します。私たちの将来に大きな影響を及ぼす高レベル放射性廃棄物の最終処分について、高校生が考えることに大きな意味を感じたことから、このテーマを設定しました。

1つめ、高レベル放射性廃棄物についてです。高レベル放射性廃棄物とは、使用済み核燃料の再処理の工程で発生した残渣物であり、現在、高レベル放射性廃棄物の日本での最終処分場は決まっています。原子力発電所は半世紀以上もの間稼働してきたにもかかわらず、その過程で発生する廃棄物の処理の議論はあまり進んでいません。北海道寿都町や、神恵内村が高レベル放射性廃棄物の日本の最終処分場の文献調査に応募したことをきっかけに、やっと処分に関する議論が日本でも行われつつあります。

2つめ、高レベル放射性廃棄物の地層処分についてお話しします。現在日本は高レベル放射性廃棄物の処分方法として地層処分を採択しています。高レベル放射性廃棄物は高い放射能を持っているため、長期にわたって人間の生活環境から適切に隔離されることが必要です。地上で保管し続ける場合、災害や戦争などのリスクのある中で、管理の負担を将来の世代に背負わせ続けることとなります。その他の処分方法として、宇宙処分や、海底処分、氷床処分などが提案されましたが、地層処分は、人間による管理を必要とせず、将来のリスクを十分に小さくできるため、国際社会からも現時点で最も安全で実現可能な処分方法とされています。

高レベル放射性廃棄物の処分における世界各国の進捗状況を示した図からわかるように、日本は文献調査にとどまっていますが、いくつかの国は最終処分場選定に向けて大きな動きを見せています。特にフィンランドでは、唯一最終処分場の建設が始まっています。フィンランドは地層処分の実施を決めてから、30年以上の歳月をかけて国民理解、地域理解に努めてきました。そこには高レベル放射性廃棄物の処分に対する国や国民の向き合い方が関係しているのではないのでしょうか。

●Not In My Back Yard

3つめ、最終処分をめぐるNIMBY問題についてです。はじめに、NIMBYという言葉について確認したいと思います。NIMBYとは、Not In My Back Yardの略で、施設等の必要性は認めるが、自分の地域には作らないでほしいという主張や考え方です。これは最終処分に限った話ではなく、幼稚園の騒音問題や、一般ごみの処分場に対する衛生面での不安などと同じ感覚です。

高レベル放射性廃棄物の最終処分についての議論が進まない理由として、この問題が基礎をなしているということが考えられます。高レベル放射性廃棄物も、一言で言えば人間の生活の中で生まれたごみです。例えば、家庭で出た燃えるごみは決まった曜日に回収して、規定に沿って焼却という形で処分されます。高レベル放射性廃棄物も他のごみと同様に処分方法を確立し、処理していくのは当然



■テーマ「高レベル放射性廃棄物とそれを取り巻く問題について」

り前のことなのです。

●日本の高レベル放射性廃棄物の現状

4つめ、日本の高レベル放射性廃棄物の現状についてです。現在、日本の高レベル放射性廃棄物は、青森県六ヶ所村にあり、高レベル放射性廃棄物を9本入れた上に2メートルのコンクリートで放射線を遮蔽するという形で管理されています。

私たちは先月の六ヶ所村研修で、その貯蔵中の高レベル放射性廃棄物の上に立ってきました。そこでは身をもって安全に管理されていることや、地層処分の有用性を確認することができました。この写真は、高レベル放射性廃棄物の上で撮影した集合写真です。ここで、こちらの線量計の値に注目してください。0.000mSv/hと表示されています。この数値を見て、皆さんは何を感じるでしょうか。放射線が全くないと捉えてしまう人いるのではないのでしょうか。では、1mSv/hと、1,000μSv/h、線量が高いのはどちらでしょうか。答えは、どちらも線量は同じです。しかし、数値が与える印象は明らかに違いますよね。線量が同じでも、単位が違えば数字は1にも1,000にも大きく変化します。この写真の単位は、mSv/hのほうです。ここに私たちは違和感を感じました。違和感の原因は、μSv/hという表記ではなくmSv/hという表記によって、大きな単位で表現していることです。住民や見学に来る人々の信頼や安心を得るためにも、私たちが見慣れているμSv/hという表記でありのままを正確に、わかりやすく伝えていく必要があると思います。



●3つの「ない」を意識する

最後に、まとめをさせていただきます。まずはこちらの画像をご覧ください。この画像は大熊町の吉田町長、寿都町の片岡町長が語った高レベル放射性廃棄物に対する思いです。私たちは研修中にこの話を聞いて、先送りにしないという二人の向き合い方がとても印象に残りました。高レベル放射性廃棄物の最終処分に関する議論がやっと動き出した現在、次の3つの「ない」という意識を持って議論を進めていくべきだと私たちは考えます。

1. 他人事にしない。2. 特別視しない。3. 先送りしない。

では、これらについて説明します。1つめは「他人事にしない」です。私たちの生活にとって、電力は切っても切り離せない存在です。電力によって私たちは多くの恩恵を受けています。そのために私たちの生活の中で生み出される高レベル放射性廃棄物というごみの処理は、誰もが関係している課題なのです。そのため、私たちは誰もが当事者であり、責任を負っています。ですから、人ごとではないのです。これはSDGsの12番目の目標「つくる責任、使う責任」にも深く関わっています。

続いて2つめ「特別視しない」です。高レベル放射性廃棄物は生活によって生み出されたごみです。今、世界では、海洋プラスチックや排出される二酸化炭素などの問題が注目されています。高レベル放射性廃棄物についても、特別視せずに対応を考えていく必要があると思います。

最後に、3つめの「先送りしない」です。対応を先送りしたことの深刻さを高レベル放射性廃棄物の処分などから学ぶことができます。目先の利益を優先した行動や、短期的な視点での決定が将来に大きな影響を及ぼすことを今に生きる私たちは身をもって知っているはず。特に大きな影響力を持つ国や行政の判断はとても重要です。今のためにも、将来のためにも先送りすることは許されせん。

「これら3つの『ない』を実行するのは？」  
「いつやるの!？」  
「今でしょう!」

以上で私たちの発表を終了します。



〈1班〉 ■テーマ「寿都町のこれからのまちづくり」

～文献調査を選択しなかった場合と、選択した場合の比較検討～

●大学生ファシリテーター 瀧山 美聡 (藤女子大学 4年)

発表  
高校生

- 齋藤 茉穂 (相馬高校 2年)
- 吉田 蓮司 (磐城桜が丘高校 2年)
- 蛭名 翔大 (北海道寿都高校 1年)
- 山本 つむぎ (北海道寿都高校 1年)

●文献調査が地域にもたらす変容

私たち1班のタイトルは「自治体における地層処分検討に伴う変容について」です。はじめに、テーマ設定に至った背景について説明します。私たちが研修を行った地域での学びの共通点として、地域愛、財政維持の大変さ、次世代に残された課題があります。この研修を通して、私たちは2つのことを問題意識すべきこととして考えました。

1つめは、寿都町の文献調査が地域社会にもたらした変容についてです。2つめは、今後、地層処分を検討する地域におけるリスクとベネフィットについてです。この2つの問題から、私たちの構想案を発表します。

発表全体の流れは、1章から終章まで、このようになっています。

●寿都町の課題と取り組み

最初に、寿都町の現状と、文献調査後の町の変化について説明します。寿都町の人口は、令和4年3月31日の時点で2,720人となっています。寿都町人口ビジョンによると、これからも人口減少が進むことが予想されます。さらに、寿都町では少子高齢化が進んでいます。今後、まちづくりに十分な財源が確保できず、市町村合併のリスクが高まる恐れがあります。北海道はとても広大な土地を有しており、そのため、合併の際に発生するデメリットが多く、危機的状況になることが予想されます。よって、人口減少はこの図のような負のスパイラルを招いてしまうと考えられます。

こうした課題と向き合うために、寿都町では、魅力づけとして様々な取り組みを実践してきました。例えば、地域資源である風を生かした風力発電事業、寿都診療所の設置、ご当地グルメ、ほっけ飯の販売。新たな農業として、風のバジルの栽培などがあります。小さな規模の自治体でありながら、町民の生活の豊かさを求めて取り組んできたことが、今の寿都町を見るとよくわかります。さらなる魅力づけとして、今回の研修で実際に見聞きした浜通りの取り組みをもとに、私たちの考案をまとめました。

北海道南後志地方の活性化のための近隣町村との地域間連携、雇用の創出、子育て環境の充実、地域住民が一体となるイベントの開催などを挙げました。ただし、人口動向や財政収入は自治体としては切実な問題であり、取り組みを実現させるためには、多くの人々に寿都町という地域を知ってもらう必要があります。

●文献調査による2つのインパクト

こうした中、寿都町は令和2年10月9日に高レベル放射性廃棄物の最終処分場設定における文献調査に応募しました。これは国策への協力であると同時に、全国の人々が寿都町に関心を寄せる機会となりました。よって、次の2つのインパクトを残したと考えます。

1つめは、社会的インパクトです。全国の各自治体が高レベル放射性廃棄物の最終処分問題を考えるきっかけになったと思います。この先、この問題に地域全



■テーマ「寿都町のこれからのまちづくり」

体で向き合い、自分ごととして捉える人が今よりもっと増えればと思います。

2つめは、地域内インパクトです。文献調査に手を挙げたことによって、まちづくりの機会が生まれます。他地域からの注目、ふるさと納税での応援の声、交付金という財源の獲得が例に挙げられます。私たちは、この地域インパクトがまちづくりのチャンスになるのではないかと考えます。

このチャンスを生かした交付金の使い道として、当該自治体の事業費として使う基金に積み立てる、近くの自治体に分配する、があります。現在、財政状況が厳しい寿都町において、文献調査によって得られた交付金は一過性の予算に過ぎず、財政的に粗末に使われてはならないので、目的を明確化した上で慎重に使うべきだと考えました。

そこで、具体的な交付金の使い道として、候補が上がったのがこちらです。その中でも雇用をつくる、既存産業の発展、移住者の支援、教育や子育ての支援という案は、いい循環が生まれる持続可能な投資なのではないかと考えました。

先ほど話した文献調査応募による地域内インパクトをまちづくりにうまく反映させることができると、雇用の創出、人口増加、移住・定住の加速、経済活動の活発化、地域コミュニティの活発化という4つを軸にしたサイクルを実現することができ、初めにお伝えした負のスパイラルを断ち切ることに繋がると考えています。

この考え方は、もし寿都町が最終処分地にならず、文献調査で終わったとしても、社会的インパクトはもちろん、地域内のインパクトの反映により、知名度の向上や、交付金の有効活用でのまちの発展の一步を踏み出せ、未来での大きな成果につながると考えています。

●事業者と地域の共生

2章の最終処分場・施設事業者の地域の共生について説明します。先ほど説明した社会的インパクトにより、今後全国の自治体で最終処分地の検討が行われていくと予想されます。そうした場合、受け入れ後の地域はどのような変化が起きるかシミュレーションを立てていきます。ただし、日本には最終処分地の事例がないため、ここでは貯蔵管理を行う青森県六ヶ所村を参考に地域の経過を見ていきます。

六ヶ所村はかつて過疎化が深刻な状況で、産業の発展も望めない地域でした。そうした状況下で、日本原燃の受け入れを始め、それ以降、地域と事業者が共生していく新たなまちづくりの形が実現しました。つまり、新たな事業の創出を軸に雇用が生まれ、経済活動が活発化し、エネルギー関連の社会教育の充実化といったコミュニティの活性化へと、ポジティブなサイクルの実現に結びつきました。

地層処分に置き換えた際にも、事業者との共生はベネフィットが存在する一方で、リスクについて十分に考慮する必要があります。主なリスクとしては、風評被害や災害時の被害が考えられます。そして、一番リスクが大きいと考えるのは、後戻りできないということです。文献調査の過程で、受け入れるか否かは町民の意思に基づいて対応できますが、最終処分場に決定した場合は別です。それほど町の未来を担う重要な選択になるということです。

これらのリスクを最小限に抑えるためには、高レベル放射性廃棄物がどのようなものか、正確な状況を判断し、浸透させる必要があると考えられます。六ヶ所村では、本音で話し合いを重ねた結果、安全な状況で管理されていることへの信頼があるそうです。風評被害については、2班が詳しく取り上げてくれます。

続いて、先ほど示したように、ベネフィットも存在します。経済的な豊かさは、住民の幸福度上昇につながります。実際、六ヶ所村では出稼ぎが解消され、家族みんなで過ごせる幸せにつながりました。しかし、こうしたベネフィットは、



■テーマ「寿都町のこれからのまちづくり」

リスクを抑えてこそ実現するものと考えられます。現在の日本は最終処分場が決まらないまま、青森の貯蔵管理施設にあるというのが現状で、日本のどこかの地域が手を挙げないとこの問題は進みません。先陣を切った寿都町から多くの地域にこの問題を広めて、考えていくきっかけになればと思います。

●研修で感じた思い、意気込み

最後に、研修を通して、これからの未来と、未来を担うことになる私たちのまちづくりの意気込みを発表します。



私は今回この事業を通して、納得してから物事を進めていくことが一番大切だと思いました。今後の未来につながる選択がたくさんあると思います。その中で、意見の食い違いがあったとき、今回の事業を思い出し、互いに納得していい選択をしていきたいと思っています。

僕はこのプロジェクトを通して、高レベル放射性廃棄物や地層処分の問題の現状を初めて知りました。自分がそうだったように、若者がこの現状を知らないという事実も同時に感じました。今回学んだことを、町の未来を担っていく若い世代に考えてもらうため、周囲の人たちから伝えていきたいと思っています。

地域や社会の問題に取り組むということは、多くの人の理解と力が大切だということを知りました。次世代を担う私たちは、町や社会の話題を自分ごと化して向き合い、地域に貢献できる人材になっていきたいです。

私はこれから、まずはそのものを知ってから本音で話すということを心にとめておきたいと思っています。今の寿都町は多くの課題を抱えています。今後それらをどう解決していくか、どう話し合っていくかが大切だと思っています。これは他の地域でも、日本でも同様です。また、まちづくりには、現状の把握と様々な意見が必要だと考えます。そのためには地域社会の課題に私たち一人一人が向き合うことが重要なのです。その地域ならではの発展を遂げる未来を自分たちが担っていききたいと思います。

これで1班の発表を終わります。



## 〈4班〉 ■テーマ「まちづくりを考えるために必要な教育と多世代意見交換の場の必要性」

●大学生ファシリテーター 伊藤 寛樹（北海道大学3年）

発表高校生  
佐藤 由惟（相馬高校2年）  
新妻 瑚子（磐城高校1年）  
西村 玲緒（北海道寿都高校1年）  
沖田 一心（北海道寿都高校2年）

### ●自分ごととして学びを深める

私たちのテーマは「教育でつくるより良い未来」です。私たちは今回の研修で素晴らしい学びをできたと思いました。その学びを全国で実現し、全国民で考えられるような社会にしたいという願いからこのテーマを設定しました。

今回の研修では、普通に生活していれば絶対に見ることができない場所を実際に見ることができました。特に福島第一原子力発電所と帰還困難区域内の視察は、私たちの人生において非常に大きな体験だったと感じています。

私たちは、廃炉作業が行われている福島第一原子力発電所の敷地内に入り、現在の状況を見るときには防護服をまとうと思っていましたが、実際は手袋をはめ、ベストを着て、ポケットに線量計を入れるだけでした。これは放射線量がここまで抑えられてきたことを示しており、敷地内の放射線量は私たちが暮らすまちとそれほど変わらなかったことも驚きました。また、処理水を溜めたタンクがたくさんあり、まだまだ廃炉作業の途上にあることを再確認しました。

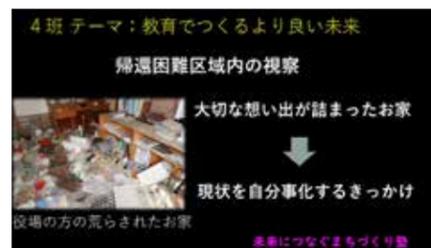
次に、双葉町の双葉町役場の方がお住まいになっていた家を見学しましたが、自分が生まれ育った地域で、家族と一緒に笑って、泣いて、時にはケンカして、それでも家族みんなで支え合って、大切な思い出がこの家にはたくさん詰まっています。この地域に住んでいた方々の9割が自宅を解体することを選択しています。たとえ除染作業が完了しても、現在の状況では住むことが困難であり、また、仮に戻ってくることができたとしても、放射線への恐怖心や、インフラ不足、お店がないなど、活気がない地域には戻ってこようとは思いません。

そのことを知ったとき、私たちの中にある考えが生まれました。もし、自分の生まれ育ったふるさとのような状況だったら。これが私たちが福島県の現状に当事者意識を持って全て自己責任で捉え、物事に取り組めるかという「自分ごと化」された瞬間でした。この経験は私たちにより深い学びを得ようと決意させ、その後の研修の議論を深めることにつながったと実感しています。

以上のことから、学びを深めるためには、自分に関係のある事柄であることを自覚する必要があると考えます。また、こうして捉えることで、NINMBY問題に立ち向かうことができます。これらの課題は日本全体で取り組む必要があるのです。自分ごと化も日本全体でなされる必要があるのです。

### ●自身の目で確かめることの大切さ

寿都町をバスで移動している際に「最終処分場建設絶対反対」と書かれた看板を見つけましたが、皆さんの地域を想像してみてください。そこに幼稚園が建設されるとした場合、「幼稚園建設絶対反対!」という看板があったら、皆さんはどう思いますか。私なら、合意形成を図れない、これ以上議論ができないと感じます。それに最終処分場の問題は、触れにくい、話しにくいと思いますが、この問題を解決するには、お互いの意見を合意形成していかなければ



## ■テーマ「まちづくりを考えるために必要な教育と多世代意見交換の場の必要性」

なりません。

また、この研修を通して様々な立場の方々の話を聞く中で、正しい知識が重要と考えました。そもそも正しい知識とは何なのかを考えなければならず、受け身で得た情報は正しいか正しくないかは判断が難しいし、その情報に頼っていいのかわかりにくいはず。そして、与えられた情報で正しいかどうかを判断する力、目の前の情報に対して、批判的な姿勢を持って自分の意見を持つ、この姿勢こそが重要ではないでしょうか。さらに、自分の意見を持つときには、最終的に自分の目に頼ることが一番重要です。なぜなら、報道で聞いた情報より、実際に目で見ることで初めて得られることが多いからです。私の実感としても、私が見てきたことを話すときに自信が持てます。

### ●地域の学びを全国へ

私は青森県六ヶ所村の研修で、日本原燃や役場の方々からお話を聞き、六ヶ所村の方々には原発に対する関心が高く、学ぶことに対して意欲的であると感じました。六ヶ所村では、企業が地元の教育現場と協力し、教育活動が行われており、小学校の頃から学習を積み重ねているため、学びへの抵抗がなく、意欲的に学習しています。そして、実際に現場で得た知識を持っているため、より深い学びができています。しかし、その他の地域では原子力に関する充実した学びができていないため、教育に差が生まれてしまうと考えました。ここで言う教育の差とは、地域社会が協力している地域と、その他の地域の間で生まれる学ぶ内容や学ぶ側の態度の差のことを言います。

では、なぜ教育に差ができることが問題なのでしょうか。高レベル放射性廃棄物は、福島だけでなく、全国民が考えなければいけない問題であり、高レベル放射性廃棄物は、事故が原因で発生しているものではなく、全国各地にある原子力発電所から排出されるものです。そして、自分のごみは自分で片付けなければいけない、日本でごみは日本で処理しなければいけないと思います。ゆえに、原子力についての問題は、そのような自分ごとの姿勢で様々な立場から意見を出し、より良い方法を見つめるため話し合うことが必要になります。

しかし、教育に差が出てしまうと、全国民が同じ土俵に立って話し合いをすることが難しくなるため、教育の差をなくすることが大切だと思います。それらを実現するためには、六ヶ所村のように地域と企業が連携を強め、学習していくことが必要だと思います。そして、これらの地域と連携した社会教育が全国でできることが、教育の差をなくすことにつながると思います。

### ●地域教育と義務教育の連携

今回の研修で私たちは非日常の経験と、胸が痛くなるような光景を目の当たりにしましたし、様々な方のお話を聞いて、今までの自分の知識の少なさや偏りに気づかされることもありました。そして感じたのが、本事業や六ヶ所村のように地域社会の教育を充実させる必要があるということです。高レベル放射性廃棄物や放射能、福島第一原子力発電所について、どのように危険なのか、どのような対策が効果的なのか、深く考えている方はそう多くはないでしょう。私たちも最初は福島第一原子力発電所での体験の前までのような独断と偏見で考えていたような節がありました。しかし、今回の研修を通して、私たちの考えは大きく変化し、この体験を全国の小中高生にもしてほしい。これが私たちの願いです。

地域社会の教育のみに焦点を当てるのではなく、義務教育も充実させなければならぬと私たちは考えています。理由の1つは、義務教育で学ぶ基礎、すなわち知識や情報に対する態度、答えのない問題に取り組む経験を養うことで、地域社会の教育の場でも主体的に参加でき、学びがより深くなるためです。また、小学生の頃から継続的に学び、向き合い続けることで、触れにくい、話しにくい問題に対する意識のハードルが下がり、地域社会の教育の場に自主的に参加できる



■テーマ「まちづくりを考えるために必要な教育と多世代意見交換の場の必要性」

のです。

義務教育で学ぶ内容としては、高レベル放射性廃棄物や放射能、福島第一原子力発電所、エネルギーについてなどが挙げられます。また、答えのない問題に立ち向かうことで、多面的に物事を考える力や、自分の考えを伝える力、自分とは異なる意見を受け入れる力、つまり受容する力、そして合意形成の力を養うことで、NIMBY問題へ立ち向かう資質、能力を育てることもつながります。地域社会の教育と義務教育とが連携して、その両輪を回すことで、若い世代の意識が変わり、彼らに感化された上の世代が増え、日本全体で問題に取り組むことができるはずで

今回の研修では、高校生が様々な問題に取り組み、政治的な問題で触れにくい問題に対しても、自由な立場である私たち高校生だからこそ柔軟な発想で取り組むことができます。先ほど述べたように、そのような若者の姿に感化された上の世代も共に問題に立ち向かうような社会をつくるために、義務教育と連携した地域社会の教育の普及が今必要なのです。

その後、地域社会の教育とは何か改めて考え直したところ、新たな考えが生まれたので、皆様にお伝えしたいと思います。

●教育がまちづくりの第一歩

地域と企業が連携した教育の一例として、六ヶ所村と日本原燃の関係についてお話しします。六ヶ所村は1班が述べていたように、過疎化している状態を改善したいという思いから、新しい取り組みとして、日本原燃リサイクル施設を誘致しました。その一方で、日本原燃と六ヶ所村には地域と企業という大きな壁が、日本原燃が地域に寄り添い、溶けこめるように、全戸訪問や出前授業を行い、長い年月を経て信頼関係をつくり上げ、企業が地域の一員としてまちづくりを行うようになりました。私たちは、企業が地域と連携し、一緒にまちづくりについて考えていくことが地域社会が育つ基盤になると考えました。

そう考えた上で、未来のまちづくりについて、地層処分の場合について考えてみると、地層処分がどこになるのかわからないので、そこは固定しないものとして考えます。ガラス固化体を取り扱うNUMOという会社があり、その会社は企業も移り、社員も移り、子供が生まれ、そこで新しい1つの社会が生まれる、コミュニティができるという社会関係を築いていくと考えています。NUMOと地域社会が共に社会をつくる仲間となり、そこで子供も大人も学ぶ環境をつくり、さらに企業も学び、お互いに協力して高め合い、どちらも欠けてはならないものへと変化し、結果的に教育力アップにつながり、最終的にまちづくりへの第一歩となると考えました。

まだ、地域社会教育の答えは出ていません。これからも私たちは学び続けていきます。これで4班の発表を終わります。



〈2班〉 ■テーマ「放射能と風評被害について」

～福島の事例を参考に高レベル放射性廃棄物による風評を考える～

●大学生ファシリテーター 奥山 泰牙 (福島大学2年)

- 発表 鴨川 絃音 (ふたば未来学園高校2年)  
 高校生 坂本 卓海 (安積高校2年)  
 中山 凌空 (北海道寿都高校1年)  
 山本 遥菜 (北海道寿都高校1年)

●知識と信頼の欠如による風評

私たちは、風評被害を事実とは異なる印象や噂によって引き起こされる心理的、もしくは経済的被害だと考えています。福島においては、主に食品に関する風評被害として、市場価格の低下が起こったり、放射線に対する過剰な不安感で観光産業への打撃などがありました。こう聞くと経済的な被害が表立って見えてしまいがちですが、放射線への不安感がいじめに発展するなどして、場合によっては人命にも関わる深刻な問題です。

私たちは、数ある風評の中で、次の2つの種類を取り上げました。知識がないことによる風評と、企業や国に対する信頼がないことによる風評です。知識がないことによる風評は、福島県で言うところの米の価格低下が当たります。実際は厳しい規制基準をクリアしているのに、その事実を知らないことで「福島の米は危険」と思い、卸売業者の買い控えが起きてしまいました。

国や企業に対する信頼がないことで起こる風評には、ALPS処理水の海洋放出問題が挙げられます。国や東京電力が決定したALPS処理水の海洋放出に関する合意形成による理解醸成が不十分であるにもかかわらず、海洋放出を行うことが確定してしまったことで不信感を募らせた漁業関係者が海洋放出に対し反対運動を起こしたということがありました。結果としてこの反対運動はマスコミに大々的に報道され、福島県産の海産物に対して全国の方々に悪い印象を与えてしまったということが挙げられます。

●福島へのイメージの変化

「今回の研修を通して」を説明しますが、これから発表する2名は寿都高校生です。私たちが今から発表するのは、福島に来る前のイメージと福島に来た後のイメージです。寿都高校の生徒が最初に福島に来る前に思っていたイメージは「たくさん被ばくしそう」「福島県産の食物などは危険」というのが挙がりました。ですが、実際に訪れてみると、第一原発の中でも、放射線の量が少ないため防護服を着ることはありませんでした。そして、食も安全だということを知ることができました。このように、実際に来て、見て、感じるということが一番重要だと思います。福島に来て、初めて知ったことも僕はたくさんあります。これは4班が詳しく説明していました。

今回の研修を通して、私たちが感じたことを紹介します。私は町内で企画されていた対話の場をニュースで見ると興味を持ったときに、今回の福島研修の案内がありました。参加したことで福島は安全だということを確認することができました。厳しいときやつらいときもあったんですが、参加してよかったと思えることができました。

また、福島に訪問した直後は、私は少し怖かったです。しかし、研修を終えたときに安全だとわかりました。私がそのときに誘ったEくんは初めはあまり乗り気ではありませんでした。しかし、彼も最終的に参加してよかったと言っていました。さらに、実際に福島第一原発を訪れ、ALPS処理水を見たときにきれいになっているのを見て、私は驚きました。一日に平均130トンが浄化さ



■テーマ「放射能と風評被害について」

れているということを知ることができました。

寿都町で文献調査が行われることで、SNS 上で海産物などの風評被害が起きました。福島でも同様のことが起こっていたと SNS で知って参加しました。原発見学では、事故の話について詳しく知らず、特に被ばくについては一番怖かったですが、線量計の数字を見て安全だとわかりました。

●六ヶ所村で感じたこと

私たちは、先ほど風評被害の種類の1つとして、国や企業に対する信頼がないことで起こる風評というものを挙げました。具体的な例として、東京電力柏崎刈羽原子力発電所の不祥事に挙げられるような企業の不祥事、また、官僚や政治家の一貫性に欠ける発言など、こういった国、企業による不誠実な行いは、直接その地域に関係ない物事であっても、県外からの不信感が募るだけでなく、地域と国、企業との溝ができるきっかけとなり、将来的に風評につながるかもしれない。

私たちは先日、青森県六ヶ所村を訪れました。村民の企業に対する積極的な姿勢や、放射性廃棄物という危険なものを取り扱う企業を受け入れた経緯などを聞き、私は自治体と企業との間に強い信頼感を感じました。先ほどの4班の発表でも取り上げられた六ヶ所村と日本原燃の関係が風評という観点でも重要になると思います。この六ヶ所村の事例は東京電力や国との間で信頼関係に揺らぎのある福島県内の現状に重ね合わせて考えることができると思います。信頼のなさによって起こり得る風評、これを未然に防ぐためにも、まずは地域住民の信頼を得る必要があるのではないのでしょうか。

●風評被害を払拭するために

風評被害を払拭するためには、以下の2つのことが重要ではないでしょうか。まず、知見を得ることができる環境を整え、多くの人々が実際に訪れることができるようにすること。実際に寿都の高校生が福島に来て現状を知ったように、全国から多くの人々が来て学ぶことができると良いと思います。

そして次に、コミュニケーションをとること。国や企業と地元住民の双方が対等な立場に立ち、話し合いをしたり、国や企業が地域の活動に積極的に参加する、などをして、信頼関係を積み重ねていくことです。

風評被害払拭には最終的に人、コミュニケーションが重要であると考えられます。そのために相手を否定せず、耳を傾けることが重要です。大規模な原子力災害を経験した唯一の県として、原子力防災に特化した県としてまちづくりを行っていきたいと思います。

このような風評被害払拭が、まさに今回のテーマであるまちづくりの1つの活動であることを学びました。いつ何時、風評にさらされるかわからない今日、風評被害に遭わないように、また、得た情報が正しいのかどうかを判断できる知識を身につけ、風評被害の加害者にならないようにしていきたいです。

これで2班の発表を終わります。



5. パネルディスカッション

■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

●コーディネーター 福迫 昌之 (東日本国際大学 副学長)

- パネリスト
- 坂本 卓海 (安積高校2年)
  - 石上 琴乃 (ふたば未来学園高校1年)
  - 蛭名 翔大 (北海道寿都高校1年)
  - 中山 凌空 (北海道寿都高校1年)



◆研修で感じたこと、考えたこと

**福迫:** 今回「未来につなぐまちづくり塾」の基本的な姿勢として、高校生にまずお話ししたことの1つが、感じる、そして考えること、です。これを常に頭において取り組んでほしいということをお話しました。この交流事業の最大の特徴は、別々の地域の高校生がお互いの地域を訪問し合っ、実際に行ってみることによって感じるが多々あると。ただ、高校生には、そこで終わることなく、感じたことを考える、言い換えれば主観を客観に変える作業にも取り組んでほしいということをお話しました。



まず最初のセッションとして、「未来につなぐまちづくり塾」で感じたこと、そして何を知識として得ることができたのか、それをどう考えたのか、といったことについて、自分がどういう立場で参加したかということを含めて話してもらいたいと思います。

**坂本:** 今回「未来につなぐまちづくり塾」に参加して私が出たこと、感じたこと、考えたことについてご紹介いたします。私は、震災前は福島県の大熊町に住んでおり、2011年3月11日に発生した東日本大震災、そして東京電力福島第一原子力発電所事故によって避難し、現在は郡山市で暮らしております。故郷を突然失ったあの日ですが、当時5歳だった私の周りには、水素爆発、メルトダウン、マイクロシーベルトといった聞き慣れない言葉が溢れかえっていたのを今でも思い出します。そして、あれから11年の歳月が経過した今年、私は初めて原子力という深い問題を探求することになりました。人生で初めて足を踏み入れた東京電力福島第一原子力発電所、まず私が最初に見たのは、事故によって大きく損傷した原子炉建屋の塗装と、晴れ渡った青空のマッチングがきれいだなという率直な感想です。しかし、事故によって損傷した建屋、剥き出しになった鉄骨が生々しかったです。それでも少しずつではありますが、廃炉が少しずつ進んでいる現状を感じ取れたのはよかったです。



次の双葉町内の見学では、産業交流センターや伝承館といった真新しい施設が着々と建設されている一方で、いまだに人が帰れない帰還困難区域や、中間貯蔵施設といったものが残っているという復興の光と影を見ることができました。

大熊、双葉両町長のご講演では、ゼロから始めるまちづくりの取り組みについての詳しい説明、貴重なお話を伺うことができました。大熊町の市街地計画についても僕は初めて知りましたし、双葉町の「なりわい集落」というのも、こんなものをつくるんだなという驚きでした。おととい、大河原地区や、なりわい集落の建設現場を視察したのですが、そのときに私が思ったのは、サービスエリアじゃないかというくらいすごい新品で、きれいで、これが町だとは思えないくらいすごいところだなということでした。

そして、人生初の北海道寿都町でしたが、自然豊かで、歴史も古い町ですが、現在、高レベル放射性廃棄物の最終処分場の建設地選考のための文献調査について意見が割れています。私は賛成派である片岡町長、そして反対派である吉野さん、双方の意見を伺うことができました。そして、両者の対立がどれだけ根深いか、町がどういう現状かを目の当たりにしました。原子力施設に対する地域の対立というのは大変根深いものです。私は六ヶ所研修に行きませんでした。行った皆さんに少しでも遅れをとりたくないということで、六ヶ所についてのYouTubeチャンネルをいろいろ見ているのですが、その中の看板に「核放射能飲んでくたばれ」という言葉が書かれた看板があったんです。これを見たときにすごい衝撃を受けたというか、原子力施設に対する対立ってここまでひどいものだと思います。しかし、日本は今まで原子の火の恩恵を50年以上受け続けました。私たちが受けましたし、実際にそれで人生が狂わされたということもありましたが、受けてきたことは間違いないです。なので、この最終処分場問題や、今回のトリチウム水問題などから逃れることは絶対にできません。

そこで、私の今回の研修で得た教訓は、答えに少しでも近づくためにみんなで話し合うことです。解決が困難な問題、最終処分場の問題もそうですが、たえそういう問題にぶち当たったとしても、みんなが自分事として捉えて、少しずつ意見を出し合うことによって、問題の解決に近づくことができると考えました。

最後になりますが、私が今回の研修で得た最も大切なものを紹介いたします。それは、今まで私が見ていた動

■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

画やテレビや写真では全くわからなかった福島のリアル、寿都のリアル、原子力問題のリアルについて、実際に自分の目で見て、知ることができたこと。そして、この果てしない問題について話し合える仲間を得たこと。これが私にとって最も大きかったと思います。ありがとうございました。

**石上:** 私は小学校まではいわき市に住んでいました。中学校への入学を機に、双葉郡と深く関わるようになっていきました。中学校の頃から授業で様々な場所に行ったり、多くの同世代の人たちよりは、地域とか、原子力とか、いろんな社会について学んだり、触れたりする機会がたくさんある恵まれた環境にいると思っています。



そんな中、今回私はこの研修を通して、最終処分場や核燃料のサイクルに特に関係が強い場所に行ってきました。そこで私が見たものは、真っ向から対立する意見だったり、疑問を感じるような表現の仕方、発信の仕方でした。この研修から例を挙げるなら、最終処分場は絶対に危険だとか、逆に、安全だから大丈夫だというような真逆の主張だったり、線量の表示などです。線量の表示に関しては、線量が低いという印象を受けたり、ゼロであることこそが安全で、少しでもあったら危険だという間違った印象だったり。そんなものを受け取ってしまう人もいます。また、どれくらいまでが安全なのかかわからない、知識がないから、とりあえずゼロに近い方が安全なんだろうというような考え方に対しても、何の対策にもなっていないんじゃないかということを感じました。

ここから言えるのは、事実をありのままにわかりやすく伝えることの必要性であり、これはメディアを中心とした発信者が強く意識しなければいけないことだと思います。しかし、この現状はメディアが悪いという話で済ませているのでしょうか。線量がゼロであることを求めているのは、もしかしたら私たちなのかもしれません。今挙げた例以外にも、様々な事柄においてゼロか100か、白か黒かのような極端な答えを求めてしまっていないでしょうか。正確な情報を知って、客観的な視点から物事を考えて、最も注意しなければいけない、変わらなければいけないというのは、もしかしたら私たち自身なんじゃないか、というのが今回の研修を通して私が一番強く感じたことです。これこそ自分事にするということなのではないかとも考えました。

また、話は変わりますが、実際に見て感じ取れたことを、今回の研修で出会った遠く離れた寿都の高校生、もしくは福島県内の高校生と共有できたこと。そして様々な形で関わってくださっているたくさんの大人たちと共有して、本当に何時間も、何か月も、一緒に悩んで悩んで話し合うことができたことは、私の人生にとってすごく大

事な経験になったと思います。本当にありがとうございました。

**緒名:** 私は「未来につなぐまちづくり塾」を通して、放射性廃棄物に対する考え方や、東日本大震災などの影響からすごく大変な思いをしているのだなということがわかりました。特に印象に残っている場所は、第一原発、双葉町の訪問、寿都町民として片岡町長のお話や、吉野さんのお話を聞いて、最終処分地の賛成、反対、どちらの意見も聞けて良かったです。初めに第一原発を見たとき、私は衝撃を受けました。廃炉作業の一番心臓部となるところに木がそのまま残っていて、とても心が痛くなりました。私は3.11のことを鮮明に覚えています。当時、私はとても小さく、映画を親と観た帰りでした。寿都に帰る途中の海岸沿いの道が津波の影響で帰れなくなってしまっていて、遠回りをして帰ったという記憶があります。帰った後にテレビをつけてみると、とても大きな地震が起こり、それに続くように津波が押し寄せ、まちが壊れていたことが蘇ってきました。



その後に行った双葉町の訪問は、行くまでは帰還困難区域により貯蔵管理施設になった町という認識で行きました。ですが、僕の想像をはるかに超える現場の数々がありました。それを間近に五感で感じる事ができたので、少し災害に対して恐怖を覚えました。また、役場の方の実家を見せていただき、強盗やハクビシン、イノシシといった動物に荒らされてしまったところを見て、住めなくなってしまう上に、もっと心にダメージを与えるようなことがあり、大変だなと思いました。

最後に片岡町長と吉野さんの話を聞き、賛成、反対、どちらの意見も理解できましたが、同じ土俵に立っているのに、話の内容が異なっていました。吉野さんのお話は、放射性廃棄物が寿都に来ると風評被害になるという考えが怖いというものでした。それに対して、片岡町長は、寿都町という町を存続させるために交付金を得て、洋上風力などの寿都の地形を理解した上での新しいチャレンジをしたいという考えであることも知ることができました。様々なことに積極的に取り組んでいるということも聞けたので、もっと放射性廃棄物に対する安全性を寿都町民に丁寧に説明したほうがいいのかと思いました。また、寿都町民だけでなく、周りの町民や村民、このことを理解している人は少ないと思います。なので、もっと放射性廃棄物が安全ということを広めていくことが大切だと思います。

最後に、私がこの授業を通して一番印象に残っている言葉があります。吉野さんの言っていた「選択は努力より大きい」という言葉です。この言葉は、努力をどれだけしても、選択した過去には戻れないし、今後の未来につながることは慎重に選択していき、選択した道はたくさん努力していきたいなと思いました。

■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

**中山:** 僕が「未来につなぐまちづくり塾」を通して感じたことは2つあります。1つは被害の大きさです。福島第一原発事故が起きた2011年3月11日というのは、僕たちの世代は4歳から5歳の年で、私は何が起こったのかわかりませんでした。何も状況がつかめないうま、何もわからないままでした。ですが、震災から約10年たって、僕が高校生になってから、福島原発に行く途中、バスの中で見たときの「Fukushima 50」という映画や、窓から見える周りの景色には、心が痛くなるような光景が広がっていました。福島に行く前にぼくは勘違いをしていて、事故があった部分だけが被害を受けていたと思っていたのですが、実際に来てみることで見えたのは、原発もろろんなのですが、その周辺の家や田畑が荒地に変わっていったということが、高速道路を通っているときに見られました。また、大手チェーン店などいろいろな被害を受けて営業できなくなってしまったりとか、そういうのを見たときに心が痛くなりました。今でも仮設住宅という形で住んでいる人が多く、原発の被害や津波までも来たという証拠にもなると思います。また、高速道路付近まで津波の被害を受けていたということが一番感じたことです。



2つめは、被害を受けたところは今、一生懸命復興しているということです。被害を受けた大熊町や双葉町の町長の話を実際に聞くことは貴重な体験で、本当に大切な時間を過ごすことができたと思います。お話を聞いた中で、僕が一番心に残ったのは、被害に遭った町に町民を戻すため、または増やすことに一番力を入れて、活性化させようとしていることです。それがよくわかりました。今はまだ帰還困難区域だったり、立ち入ることができない場所が多いと思うので、僕はまず、町民を戻す、または増やすことも大事だと思うんですけど、立ち入り禁止のところを減らすことが一番重要ではないかなと思いました。

こういう機会をつくってくれて、話を聞いたので、実際に来ないとわからないものもあるんだなということがわかりました。



◆大熊町、双葉町のまちづくりを進めるために

**福迫:** ありがとうございます。では第2セッションでは、大熊町、双葉町のまちづくりを進めていくために、というテーマで話し合いたいと思います。夏の研修で大熊町、双葉町を視察しましたが、それを踏まえて、まちづくりを進める上での課題や提案をそれぞれ発表してもらいます。まず、4人に簡単な文章でまとめてもらいましたので、それを掲げてください。これについて、それぞれの言葉で話をしてもらいたいと思います。

**石上:** 私は、福島県浜通り、特に双葉、大熊町でまちづくりを進めていくためには、行政による「正確な情報の発信と共有」が必要だと考え、このキーワードを書かせていただきました。私たちが行ってきた青森県にある核燃料のサイクルの工場の工事再開には7年もの時間がかかっていたんです。ちなみに工事は再開されているんですけども、それは延期されていました。そのうち原子力規制委員会の審査にかかった時間が1年9か月もあるんです。私は時間がかかったことが悪いというふうには考えていません。ただ、なぜこんなにも時間がかかってしまうのか。どうして予定通りに進められなかったのか。どんな審査が行われていたのか。という疑問がたくさん浮かびました。工事を管理する会社の社長にお話を聞いたところ、地域の人に納得してもらうために必要な時間だったから無駄ではないんだというお話でした。もちろん私も全てが無駄だということを言いたいわけでは



ありません。なんでそうなるのという疑問が浮かぶ状況がいけないと思っています。もちろん、私たちも理解しよう、知ってこうと努力しなければならぬというのは当然のことなんですが、行政や会社は正確な情報を地域などと共有していく必要があります。また「関係者と共有します」という表現がよく使われますが、その地域にいる人はもちろん、その国にいる人も、同じ星に住んでいるという意味では世界中の人、地球に住んでいる人全ての人に関係者であると私は考えています。ですから、情報はなるべく広い範囲の人々と共有することが必要です。

さらに、それを見る方は「そうですか」と納得してしまうのではなくて、なんでこうなるの、もっとこうできないの、改善できないの、というふうには、自分自身で理解して、咀嚼して、考えて、それを示して双方で取り入れていくことが必要だと思います。それによって、一方的なことにするのではなく、ともに同じゴールを目指していくことができると思います。今のこの場でも、私たちの話を聞いてずっとメモを取ってくれている方もいます。私はそんな大人がもっともっともっと増えてほしいと思います。これは六ヶ所村に限ったことで

■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

はなくて、どんな地域のまちづくりに対しても同じことが言えると思います。ただ、私たちが今回研修で学んだ双葉町や大熊町をはじめとした浜通り、福島県は、震災や原発事故の影響を間違いなく受けています。ですから特にこれらのことに力を入れて、これを前提としているような政策だったり、まちづくりを進めていく必要があると思います。以上です。

**蛭 名:** 僕が一言でまとめたポイントは「エコの町」です。どういう流れでこのエコの町に結びついていくかを考えながら聞いていただけるとありがたいです。大熊町、双葉町、2つの町の共通の課題は、どちらも人口を増やさなければいけないということだと思います。そのためには何か新しい事業をしないと人口は増えていかないと思います。双葉町では「なりわい集落」という新しい企画を考えていますが、その企画を実行したとき、新しく人が来るかという課題もあります。僕が実際、なりわい集落を見てきて、双葉町は新しく住宅が並んでいて、駅の周りに新しくできていたんですが、その課題として、若者が町に来ないという課題もあると思います。これらを改善していくためには、知名度アップ、または若者にとって魅力のあるまちづくりが大切だなと思いました。そのためは、新しく実施したタオルの企業の新商品などを無料で配布したりすると、もっと町が活発になっていくと思います。



次に、大熊町ですが、大熊町も失った町を新しく作り直すという事業に取り組んでいます。僕が実際に見てきたところでは、役場、公民館、スーパーなどの3つの主要建物のもと、斜めに住宅を設置しているところなどの工夫も見られました。やはり双葉町と似ていて、その中でも僕が見に行ったときは、若者が一人も見当たらなかったもので、そこも課題に挙げられると思います。昔大熊町に住んでいた人たちを呼び戻すためには、昔ながらのオブジェをつくったり、些細なところで「ああ、昔こういうのあったなあ」などの懐かしさを思い出させることが大切なのかなと思いました。

どちらの町も再生可能エネルギーの導入や、ゼロカーボン都市宣言など、エコなまちづくりに取り組んでいます。ただし、高齢者が多く、若者の帰還や移住が少ないという課題もあります。福島県の浜通りで水素エネルギーを推進しているということもあり、水素自動車を使ったスマートシティということを提案します。この事業と似ていることを先にやっている都市があり、群馬県の前橋市で自動運転バスという事業に取り組んでいます。この事業は高齢者に対して快適を目的とした活動を行っており、それをただ自動化するのではなく、水素を使い、その自動車を水素化することによってCO2の排出が抑えられ、よりスマートシティに近づいていくのではないかと考えます。両町ともゼロから新しいまちづくりを進め

ているので、思い切った先進的な取り組みができるのではないかと考えます。

**中 山:** 僕が浜通りの双葉町、大熊町がまちづくりを進めていくための課題提言としてしているのは「若者への実体験の発信」です。最近の若い人はテレビをあまり見なくなっていると思っていて、スマートフォンやパソコンの普及が早く、若者はまずそっちの方に手をつけていくのかなと思いました。逆に高齢者や大人の方は、天気予報は基本的にテレビや新聞で情報を得ることが多いと思います。これがまず若者と大人の違いだと思います。



どうして実体験なのかということ、福島原発事故で被害に遭った人たちがツイッターなどのSNSを通じて情報を発信していくことによって、大人だけが理解するのではなく、事故のことを知らなかった若い人たちや、その当時に生まれていなかった人も、それを見ることによって深く知ることができると思います。ですが、若者が全員、SNSを通じて情報を得るといえるとは違って、まだ小学生などはスマホを持たせてもらえなかったり、情報を得るのが少ない子もいると思うので、テレビでも情報を発信することで、高齢者や大人の方たちにも伝わります。ネットだと若い子たちやSNSを活用している人たちに伝わっていくので、そのような実体験をまず増やしていくことで、なりわい集落などに人口が増えていくのではないかと考えました。

今回、Jヴィレッジに泊まっていますが、Jヴィレッジのホームページを見ていて気づいたことがあります。Jヴィレッジの料理のお米は福島県で作られたお米を使っているそうです。僕は最初、8月に来たときにはそれが全くわからなくて、ずっと続けているということを知り初めて知りました。先ほど僕たち2班の発表で風評についてお話をしたんですが、ネットだけでは信ぴょう性がないというか、本当に正しいかどうか分からないというのが一番欠点だと思います。僕が経験した今回のJヴィレッジの料理で、福島県のお米が使われているというのをテレビやSNSを使って発信することで、どんどん若者が興味を持ったりすることができるのではないかと考えます。

最後に、ネットやテレビも見られない人もいないのではないかと考えていて、そのような人々に関しては、復興を目指しているということを知らせて方がいいのかなと思います。おそらく両方の町で知らせているとは思いますが、まだ足りないのかなと思います。そして、理解をしてもらえるような説明会みたいなものを定期的に開くことによって、もっと理解してもらえるのではないかと考えます。

■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

**坂 本:** 私がこの研修を通して大熊町や双葉町の街並みを見てきた中で、いくつか共通点が存在するのではないかと考えました。1つが、福島第一原子力発電所は大熊町と双葉町にまたがって存在しているということ。そして、原発事故によってどちらも全町避難を余儀なくされたということ。さらに、現在ゼロからのまちづくりの構想が始まっているということ。そして今回の話題に関するものなのですが、町の人口は現在でも震災前の人口を大きく下回っていること、などが挙げられました。この人口の減少というものは、将来的には財政規模がどんどん減少していくことにつながります。これからゼロから始めるまちづくりをやっていくにあたって、一番の問題は財政です。現在、人口が一度ゼロになったことによって財政もまだそこまで回復はしていません。そして、これから復興支援に関する交付金として、福島第一原発が廃炉になることで、電源立地地域対策交付金もなくなってしまいうこととなります。これらの財源がなくなったときに、双葉町、大熊町はどうやって町を維持していくのかというのが課題だと思います。

そこで、私からいくつか提案させていただきます。まず、ゼロからまちづくりをしていくにあたって、多額の投資というのは必要不可欠です。しかし、財源は限られており、そう簡単にたくさんのお金を投資することはできません。そこで、何に投資するのか、優先順位はどうするのか、ということは特に重要だと思います。まず、財政規模を少しずつでも回復させるためには、インフラを整備しなければなりません。そのインフラ整備としてまず私が一番最初にやっていきたいものは、交通の便の向上です。



現在の状況について説明します。現在、大熊町、双葉町を含む双葉郡は、国道6号線、JR常磐線、常磐自動車道などによって南北の交通が便利になっています。しかし、福島県の経済基盤の中心である中通りとの東西の交通は、相馬市から伸びる相馬福島道路、いわき市から伸びる磐越自動車道の2つの高規格道路、そして、国道288号、これらに頼っています。まず、福島県の中心地である郡山市から大熊町、いわき市それぞれにかかる時間と、平均速度を割り出しました。まず、郡山市からいわき市に行く場合は83.8kmの距離、所要時間は1時間19分です。それに対して、大熊町まで行くためには、68.8kmの距離であるにもかかわらず、1時間29分必要です。つまり、東西交通は双葉郡にとってはかなり弱いところなんです。そのため、まず、現在船引地区まで伸びている国道288号バイパスの延伸、もしくは、あぶくま高原道路の大熊、富岡への延伸を提案します。

これはもしかしたらインフラに対する過剰投資だと批判をくらう可能性もあります。しかし、いわき市へ行く方が距離が長いにもかかわらず、逆にいわき市に行った方が早く着く。つまり交通の利便性にはいわき市の方

が高い。これは双葉郡の復興を阻害するものとしても考えられます。道路の高規格化をすることによって、双葉郡までの所要時間が短縮され、利便性が良くなり、双葉郡の復興にさらなる拍車をかけることになると思います。



そして、大熊町と双葉町は運命共同体だと考えられます。両町は共通点も多く、同じ境遇でもあります。ここはひとつ協力してみたいかでしょうか。そこで1つ提言です。町の中に若い人を呼び込む場合には、教育施設が必要です。しかし、教育施設を運営するためには多額の金がかかります。そこで、組合立学校という形を提案します。これは複数の市町村が円滑に学校運営をするためにお金をし合って学校組合をつくることによって学校を運営していく方式です。実際には静岡県御前崎市や牧之原市などで運用されています。この共同運営によって、大熊町、双葉町それぞれの町で生徒数が少ないとしても、2つの町を合わせれば、その生徒数は上がると私は思います。ゼロから町づくり直す際に、インフラ投資を控えめに行ってしまうのはあまり良くない話だと思います。しかし、財源というのは無限には存在しません。そのため大熊町、双葉町の未来の財政を圧迫してしまわないように、優先順位をつけ、省けるところは省くといった財政措置が重要だと思います。

**福 迫:** 今回、非常に難しいテーマに高校生たちが取り組んでくれました。正直、我々大人も扱いに困るような課題について、適切な研修メニューをどうすれば提示できるんだろうと試行錯誤しながら運営してきました。そういう中、皆さんは時に心が折れそうになることもあったかもしれませんが、無事に走り抜けて発表までこぎつけてくれました。この課題はまだ端緒についたばかりです。皆さんの発表を私たち大人も受け止めて、そして、皆さんにも引き続き学び、考えることを実践していただくことを期待して、まとめとしたいと思います。



■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

【会場からの感想】

**増子 輝彦 様** (元参議院議員・一般社団法人未来構想会議理事長)



今日の総評として、子供たちあっぱれ！ 大人、喝！と申し上げたいと思います。私は原子力のあり方というのは地球上で極めて重要だと思ってきました。原子力発電所推進論者でした。しかし、事故が起きた後は、

安全神話に抜かりがあったなと大変反省をしているんです。ですから、原子力政策を進めていくときに必要だったことは、核のごみを誰がどう処分していくのかということで、これは原発推進でも反対でも大事なことで、我々の使命であり責任なんです。ですから国会の超党派で、高レベル放射性廃棄物の最終処分場を考える議員連盟をつくりました。私が辞めた後は梶山前経産大臣にお願いしてございます。子供たちがこれから20年、30年、50年と、この問題に向き合っていかなければいけないとき、寿都町と浜通りの交流をやっていただけて良かったと。西本さん、企画してくれてあっぱれ！

そういうことで、この問題を話せば何十時間もかかり時間が足りませんが、みんなで、他人事ではなくて自分事として思っていくという高校生の皆さんのこの一言、我々も肝に銘じて頑張っていかなければいけないと思います。寿都町の片岡町長もあっぱれ！ 吉田さん、また復興のために頑張りましょう。復興と最終処分場、違うようで非常にリンクしてますから、このことを含めて、今日のシンポジウム、御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

**馬場 雄基 様** (衆議院議員)



私が国会議員になりたいと思ったのは、まさにこの復興の問題をどうしても片付けたいと思ったからです。平成世代初めてとか、20代唯一とか国会で言われるわけですが、一番重きに置いているのは、あのとき学生

だった自分が国会に行ったことだと思っています。皆様方がまだ5歳だったときに、私は高校3年生でした。この1年やってきた中で、今回のお話の中にもありましたね、政治家の一貫性のない言葉が分断を生み出すということ、私も痛切に反省を込めて思っております。

私もちょうど先々週の金曜日、経済産業委員会で処理水に関する質問をさせていただいたとき、実は大きな分断が生み出されました。それは、私の発言を一部切り取ってSNSで拡散をされてしまい、私が賛成か反対か一方方向に引きずられたという経験も持ち合わせています。そんなことは思ってないです。現場にいる人たちは、本当に今真剣にやっていると思っています。この問題、一



番難しいのは、皆様の下世代だと思っています。知らない世代です。つまりこの知る世代こそ責任世代だと思っています。一つ一つの物事が本当に厳しい現実と向き合わなければいけないからこそ、一人一人の考えを紡ぎ合わせて、バトンをしっかりと受け継いで、さらにまた受け継げられるように私たちも準備するべきだと思っています。本日はありがとうございます。

**坂本 竜太郎 様** (福島県議会議員)



若い皆さん、気合いをかけていただいてありがとうございます。今日は我々の本気度、それから覚悟を試された報告会だったと思います。しっかり肝に銘じて真正面から皆様方とともに向き合っていけるように、

地球全体の取り組みができるように、一層覚悟を決めて精進してまいりたいと思います。それから皆さん、西本さんに巻き込まれて、この大きな大きな課題を乗り越えていきましょう。素晴らしい未来を創り上げましょう。ありがとうございます。よろしくをお願いします。

**山名 元 様** (原子力損害賠償・廃炉等支援機構 理事長)



喝を入れられました。皆さんにあっぱれ！ 素晴らしい。今日いただいたメッセージは、若者たちは非常にポジティブに物事を考える。どうしてもこの事故を体験してしまうと、気持ちがネガティブになってしまう。恨みつらみに自分の気持ちが負けてしまうということがあるんです。彼らは、どちらの町の生徒たちも、前を見てニュートラルな提言をしている。これをやっぱり僕らも学ばないといけないですね。そういう意味で僕は今日喝をいただきましたので、今後も頑張っていきます。特に企業が入ってくるという言葉がいくつかありました。やはり東京電力、それから廃炉に関するいろいろな企業体、皆さんのように前向きに、一歩前へ出て、この土地の復興に企業も入って向かっていくんだらうと。そのために私どもも手伝いたいと思いました。ありがとうございました。

■テーマ「未来につなぐまちづくり塾を終えて」

**田中 博幸 様** (NEXCO 東日本 東北支社長)



今日の福島の皆さんと寿都町の皆さん、素晴らしいプレゼンありがとうございました。私は実は北海道の出身で、寿都町にも何回もお邪魔したことがあります。福島で皆さんが感じて、考えていることと、北海道で感じて考えている周りの人たちの考え

もだいぶ温度差があるかと思えます。そういった中でも、こういった福島と寿都町の掛け合わせでいろいろな相互作用があって、ということで、寿都に帰っても、福島の方々も、一過性のものに終わらせないで、自分たちからいろいろ発信していくことをお願いしたいと思います。ありがとうございます。

**高原 一嘉 様** (東京電力ホールディングス株式会社 福島復興本社代表)



今日は貴重な報告会ありがとうございました。まちづくり塾ですが、お詫びしなければいけないのは、まちを壊してしまったのは私たち東京電力の原子力事故のせいです。本当に申し訳なく思っています。その上で、今日は企業の話も出ました。やはり私たちも一歩も二歩も前へ出て一緒にやっていかなければいけないと改めて思った次第です。それから今日は皆さん、自分事、考えること、思うこと、主体性を客観性に変える、これはまさにゲームで言うところの皆さんすごいアイテムを手に入れたのだと思います。これからぜひそのアイテムを最大限に生かしていただきたいと思います。今日はありがとうございました。

今日は貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。私たち青年会議所という40歳までの団体で、まちづくりのためにいろいろな活動をしているんですが、今日はいろいろなエネルギーを皆さんからもらったと思います。皆さん、今日はたくさんの勉強をされて、発表に臨まれたと思います。たぶん勉強すればするほど、まちががんじがらめになっている現状だとか、本当に辛い、苦しい状況だとか、解決策が見つからないと感じたと思います。ただ、その困難な状況に対して、今日皆さんが持った夢とか志、そういった熱量をもってぶつかっていけば、必ず道は拓けると思いますので、どうかそういう気持ちを持ってこれからも社会に羽ばたいていていただきたいと思います。ありがとうございました。

**桜町 道雄 様** (公益社団法人福島相双復興推進機構 専務理事)



今日は素晴らしい発表をありがとうございました。今日の発表をお伺いして、この難しい課題に取り組む中で、いろいろな現地の大人たちに会ってきたことがわかりました。登場してきたのはすごいな、カッコいい

などと思える大人たちばかりだったんですけど、NIMBYというキーワードも一つ出てきました。NIMBYまで思い至ったということは、そうじゃない大人たちも出てきたんじゃないかと思えます。難しい課題は世の中にいっぱいあります。高校生の皆さんにこれだけははっきり申し上げておきますけど、世の中に出ると、甲斐のない会を作ることはばかりです。そういう中で必ず、すごいな、カッコいいなという、課題に正面から向き合っている覚悟を決めて取り組む大人もいれば、そこから目をそらす大人も両方出てきます。今回、いろいろなことを感じて、考

えた。いろいろな人と会って、いろいろな大人を感じたことが、将来にとって意味が大きいと思えますし、社会に出てそういうことをまた思い出していただき、難しい課題を乗り越えていく力を貸していただきたいと思います。本日はありがとうございました。

**中川 俊哉 様** (福島民友新聞社 代表取締役社長)



高校生の皆さん、ありがとうございます。貴重な体験をされたことと思います。メディアは悪者になっていましたけれども、我々の情報を探る原点というのは、自分たちの足で歩いて、自分の目で見て確かめる。これを原点にやっております。ということで、テレビは見ないですけど、新聞は読んでいただきたいと思います。ということで、よろしくをお願いします。

**高橋 大吾 様** (公益社団法人いわき青年会議所 専務理事)



今日は貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。私たち青年会議所という40歳までの団体で、まちづくりのためにいろいろな活動をしているんですが、今日はいろいろなエネルギーを皆さんからもらったと思います。皆さん、今日はたくさんの勉強をされて、発表に臨まれたと思います。たぶん勉強すればするほど、まちががんじがらめになっている現状だとか、本当に辛い、苦しい状況だとか、解決策が見つからないと感じたと思います。ただ、その困難な状況に対して、今日皆さんが持った夢とか志、そういった熱量をもってぶつかっていけば、必ず道は拓けると思いますので、どうかそういう気持ちを持ってこれからも社会に羽ばたいていていただきたいと思います。ありがとうございました。

とても素晴らしい会で、出演された皆さん、これを企画運営された西本さんに心から敬意を表します。皆さんに2つ言いたいことがあります。1つは、知れば知るほどわからなくなってくることだと思うんですね。そのもやもや感を大事にしてほしいです。もう1つは、やはり面白くて、おかしくないと長続きしないので、そういうところを皆さん共有して、この後の世代もくると思うので、広げていていただければと思います。どうもありがとうございました。

**澤田 哲生 様** (元東京工業大学助教)



とても素晴らしい会で、出演された皆さん、これを企画運営された西本さんに心から敬意を表します。皆さんに2つ言いたいことがあります。1つは、知れば知るほどわからなくなってくることだと思うんですね。そのもやもや感を大事にしてほしいです。もう1つは、やはり面白くて、おかしくないと長続きしないので、そういうところを皆さん共有して、この後の世代もくると思うので、広げていていただければと思います。どうもありがとうございました。

そのもやもや感を大事にしてほしいです。もう1つは、やはり面白くて、おかしくないと長続きしないので、そういうところを皆さん共有して、この後の世代もくると思うので、広げていていただければと思います。どうもありがとうございました。

## 6. 講 評

須藤 治 様（内閣府 原子力災害対策本部 福島原子力事故処理調整総括官）



私は廃炉と復興を担当しています。避難指示の解除や、新しい産業の呼び込みなどもやっています。皆さん、こういう場で緊張して口ごもってしまったり、段取りを間違えてしまったりしたこともあったかもしれませんが、その発言の一言一言は、我々の胸にはグサグサと刺さっています。皆さんが自分事としていろいろな経験をさせていただいたこと、そして、正解のない答えに果敢にチャレンジしていたこと。ですから段取りを少し間違えても、口ごもっても、皆さんの声は伝わってきます。

私もいろいろ考えさせられることがありました。その中でいくつかご紹介をさせていただきます。私の考え方ですので、参考ということで聞いていただきたいと思います。伝えていく、伝承の場というお話がありました。これは我々にとっての悩みでもあります。私

は経済産業省出身で、まさにエネルギー政策を担当してきた役所ですから、福島事故については最後まで責任を取る役所になります。でも私ももうすぐ定年です。若い職員たちに皆さんから今日聞いたようなことをしっかり伝えていく。もう原子力事故は同じ体験をしてはいけません。ですが、そういう人々の話を聞きながら責任を持って福島の復興に対応していく。あるいは原子力の最終処分の問題に対応していく。これが大事だということを実感しました。

それから、信頼という言葉がありました。行政から発する言葉に信頼がないのではないかとということです。これは本当に真摯に反省をしていかなければなりません。我々として、きっと科学的根拠に基づいた正しいことというのはあると思いますが、いろいろな考えがあることはいいのだと思います。そういう考え方をまさに議論をしながら政策の判断をしていく過程を繰り返していくことが重要だと思います。我々も、お祭りなどにブースを出して車座的な話をしたり、あるいは出前授業をさせていただいたり、個のコミュニケーションを大切にしています。それからSNSやホームページで発信をしたりということもやっています。いろいろな段階で情報を発信してご意見をいただきながら、対策を充実させていく、というところに我々として感じるところがありました。皆さん方が真摯に、勉強というよりも体験をして、考え抜いた発表は、我々にとって非常に印象深いものでありましたので、そこを改めてお伝えさせていただきます。

もう一つ、ぜひこれから皆さん、活動の中で魅力的な人探しをしていってください。福島の中でこんなにいろいろな、原発災害で大変な思いをしている中で取り組んでいる方々がいます。Jヴィレッジでは今日、福島でベンチャー企業を起すという集まりが行われています。チャレンジをしていくいろいろな人たちがいますので、皆さんもそういうところに目を向けていただければと思います。

最後に、今回皆さんがいい経験をできたのは、自分の荒らされた家をあえてご紹介をさせていただいた役場の方や、いろいろなアレンジをしてくれた方々がいたからです。そういう方たちのおかげで皆さんの発言が生きたのだと思います。多くの方々が皆さんのこの学習のために、まちづくりのセミナーのために努力いただいたことに感謝する気持ちをぜひ持っていただければと思います。今日は本当にありがとうございました。



下堀 友数 様（経済産業省 資源エネルギー庁 放射性廃棄物対策課長）



講評ということなので、今日は各班があんなに素晴らしいプレゼンをしたので、大人の一人の代表として、一言ずつ申し上げます。

5 班の皆さん、寿都の高校生が福島のこと、福島が寿都のこと、と役割を分けて、それぞれ現地を訪問して理解したのだなというのがわかるプレゼンになっていました。大変よかったと思います。特に意見交換をしっかりとできる場をとという主張も、大変我々の心にくるものがありました。しっかり前向きに考えていただいていたと思います。

3 班の皆さん、プレゼン素晴らしかったですね。0 ミリシーベルトのところも気づいていただいていたし、高校生の皆さんで考えた3つの「ない」がプレゼンにしっかり出ていて、伝わりやすくてよかったと思います。最後に「今でしょ」という、ああいうところどつかむというのも大変高校生らしくてとてもよかったなと思います。

1 班の皆さんは、内容がすごく寿都の分析をされていました。私も放射性廃棄物対策の文献調査の対応で毎月行っているんですけども、そこでの分析、寿都町の課題、負のスパイラルということ。六ヶ所村にも行ったことも参考にしながら、こういう解決策があるんじゃないかという提案。リスクを抑えながら、この負のスパイラルを断ち切るというプレゼン内容、とても良かったと思います。

4 班の皆さんの内容には感服しました。教育について、むしろ自分たちに近いことだからしゃべりやすかった、考えやすかったというのもあるかもしれませんが、自分事にする事の重要性、地域教育と義務教育といったところで、私も自分事にするのが大事だと常に国の中でも思っているのですが、どうやってそれをしたらいいのか、なかなか自分でも悩んでいるところで、皆さんからヒントを得たような気がします。最後の「ガラス固化たん」ですね。大人はなかなかああいうことには思い切れないのですが、高校生の皆さんから素晴らしいヒントを得られたという意味で、ありがたい提案だったと思います。

最後、2 班の皆さん、グサグサきました。国と企業の信頼が全くないというところは、現役もそうですし、これまで諸先輩方が良かれと思ってやってきたものの、なかなかそこに十分な思いが足りなかった。そういうところをしっかりと反省しつつ、でも皆様のように前を向いて、信頼を少しずつ得ていくにはどうしたらいいのかというところをしっかりと踏まえながら、今後取り組んでいきたいと思っています。

最後に一言、私が思ったのは、大人の社会だけではできないことがあるんだなと、高校生の発想だからこそできることがあるのだと、今日はそういった内容を受け止めることができました。こういった内容を私も国の会議や、いろいろな情報発信の場で、福島と寿都の高校生がこういうふう考えていたということ、どんどん国としても情報発信していきたいと思っています。皆様も将来にわたってもぜひ考えていながら、今後もより良い国、社会、エネルギーにしていければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。







### 寿都町課題、多面的な視点



班に分かれて意見を交わす高校生ら—12日、北海道寿都町

まちづくり塾 本県高校生研修まとめ

NPPO法人ハッピーロードネット(広野町)の交流事業「未来につなぐまちづくり塾」が、8月12日、北海道寿都町で研修のまとめとして、原発から出る高レベル放射性廃棄物(核のごみ)の最終処分場の選定を巡り、文献調査が進む町の課題などについて意見を

2022年8月13日 福島民友に掲載

### 本県・北海道高校生交流事業 核ごみ調査 課題に理解



片岡町長(左)の講話を聴く生徒たち

広野町のNPPO法人ハッピーロードネット主催の福島・北海道高校生交流事業「未来につなぐまちづくり塾」に参加している高校生

生は11日、北海道寿都(すつ)町で研修に臨み、同町が抱える課題に理解を深めた。

講話し、同町で進んでいる高レベル放射性廃棄物の最終処分場選定に関する文献調査について説明した。片岡町長は全国的な議論をするために一石を投じるの思いから調査に応じた経緯を話した。生徒からは「文献調査に反対する意見もある中で、どのようにして互いの意見を共有していくか」などの意見が出た。

2022年8月12日 福島民報に掲載

### 六ヶ所で原子力政策学ぶ 浜通りと北海道の高校生ら



六ヶ所村で核燃料サイクルの仕組みを理解を深めた参加者

NPPO法人ハッピーロードネット(広野町)主催の高校生交流事業「未来につなぐまちづくり塾」に参加している浜通りと北海道

都町の高校生計15人が17、18の両日、青森県六ヶ所村を訪れた。生徒は国が進める核燃料サイクル政策を伝える施設を見学し、今後の

まちづくりの方策を探った。10月にJヴィレッジで報告会を開き、研修で学んだ内容を発表する。

2022年9月29日 福島民友に掲載

まちづくり塾 本県高校生らによる報告会は10日前10時からJヴィレッジ(橋本・広野町)で開かれる。生徒15人は9月17、18の両日、青森県六ヶ所村を訪れ、六ヶ所原発PRセンターや日本原燃を訪れた。模型や映像を見て使用済み核燃料を再処理する方法などに理解を深めた。「まちづくりのために工夫していることは何か」「日本原燃などの施設を建てた前後で地域はどう変化したか」などを質問した。8月には浜通りと寿都町を訪れ、将来のまちづくりについて考えた。

2022年10月9日 福島民報に掲載

### 本県と北海道の高校生交流 放射性廃棄物の研修成果を発表

広野のハッピーロードネット Jヴィレッジで報告会



広野町のNPPO法人ハッピーロードネットの福島・北海道高校生交流事業「未来につなぐまちづくり塾」の報告会は10日、Jヴィレッジ(橋本・広野町)で開かれ、生徒が研修の成果を発表した。

大熊、双葉の未来に意見 交流事業には本県と北海道寿都(すつ)町の高校生計20人が参加。8月に寿都町で、原発から出る高レベル放射性廃棄物の最終処分場選定に向けた文献調査について考えた。本県の浜通りも訪れ、東日本大震災や東京電力福島第一原発の現状を視察した。

2022年10月12日 福島民報に掲載

### 互いの古里視察し 将来像の情報共有

広野町のNPPO法人ハッピーロードネット主催の福島・北海道高校生交流事業「未来につなぐまちづくり塾」に参加した高校生15人は13日、本県に帰った。7日から13日まで県内、北海道寿都(すつ)町で研修に臨み、古里の未来像とまちづくりを考えた。



片岡町長(前列中央)の講話を聴いた関係者—11日、寿都町

2022年8月14日 福島民報に掲載

視察で物事を考えることが大切だと感じた。「実際の足を運ばないと分からないことがあった」などの声が出された。

同NPPOの西本由美子理事長(69)は「日に日に子どもたちの顔つきが変わってきた。正しい知識を身に付け、自分の意見を持って判断できる大人になってほしい」と話した。

参加した高校生は10月、Jヴィレッジで開かれる報告会で研修で学んだ内容を発表する。

グループごとに議論し、まちづくりの在り方を考える生徒たち—12日、寿都町



広がる夢 つながるまち  
ハッピーロード



#### 主 催

特定非営利活動法人 ハッピーロードネット

#### 協 力

経済産業省 資源エネルギー庁  
一般財団法人 電源地域振興センター

#### 後 援

福島県、福島県教育委員会、  
福島イノベーション・コースト構想推進機構  
福島民報社、福島民友新聞社  
東日本高速道路株式会社